絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践
～絵本『ベリーくんのきのみやさん』の世界を楽しむ～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年
阿部巧・梅本楓・大塩智美・
桐原李羽・古賀詩織・後藤聖佳
境結愛・友添美和・乗富千裕・
樋口真理亜・保坂輝穂・山村京平

題材とした絵本：『ベリーくんのきのみやさん』
文・絵：かとうゆうこ 出版：エド・インター

タイトル：「どうぶつさんとピクニック」

実践準備の担当：プロデューサー（保坂輝穂）、衣装（友添美和・乗富千裕）、小道具（阿部巧・梅本楓・大塩智美・桐原李羽・後藤聖佳・山村京平）、音楽（古賀詩織・樋口真理亜）、記録・報告書（境結愛）

実践時の担当：キツネ（友添美和）、ウサギ（古賀詩織）、リス（保坂輝穂・大塩智美・桐原李羽）、クマ（梅本楓）、シカ（樋口真理亜）カエル（山村京平）、ナレーション（後藤聖佳・境結愛）、音・演奏（乗富千裕）、カメラ・音響（阿部巧）

1. 題材『ベリーくんのきのみやさん』選定の理由

絵本の特徴として、子どもに色や数に興味を持って貰えるように、トイ絵本として付属のおもちゃの玉が付いている。それで認識力だけではなく器用さ、思考力、集中力も養われる絵本だそうだ。付属のおもちゃはなかったので使うことができなかったが、自分達で試行錯誤しながら折り紙を使用したり、木の実と言えばと考えて、木に実る果物を考えて作った。対象に適したものであると考えた理由として、数を数えると言うことをふまえて考えていた

ため、対象児は３、４歳児より5歳児の方が数えることが上手にできるのではないかと思い5歳児にした。また、こちらが伝えたい意図などが、わかって貰いやすいのも5歳児だと思った。絵本が木の実やさんなのでそれにあった木の実を子ども達には果物のピザを作って貰おうと考えたが、実際にはないため現実にないものはやってもらえるか分からなかった。しかし、子ども達にも参加して欲しいと思ったので、5歳児を対象児にした。

（執筆者：保坂輝穂)

2.絵本の世界から遊びへの展開

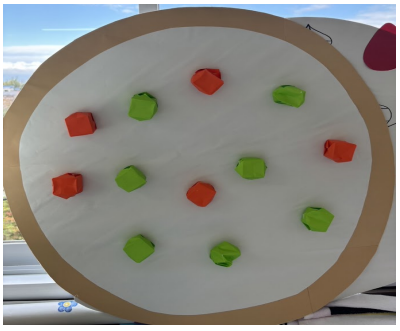
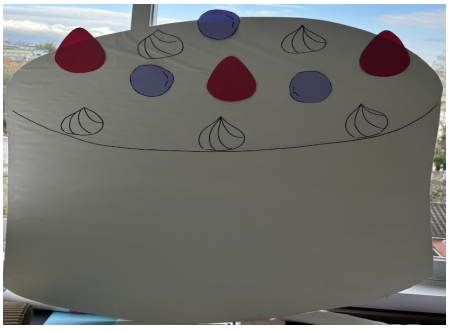
絵本を題材に展開できる遊びとして考えたものは、元々の絵本自体が数を数えて遊ぶことの出来る絵本だったので、それを使おうと思っていましたが、他にも遊びがあるよと先生方に教えていただき、木の実を分けるようにするのと、その木の実を使って絵本自体ケーキやピザを作りピクニックをしていたので木の実をケーキやピザに貼り最後に作った物を持ってみんなでピクニックに行くという案がでたので、子ども達に木の実の場所を決めて貰うことをカメラを通してやってみたりしました。
最終的に利用したものなどについては、背景に何かあった方がいいと思い、木を4本ほど作り木に付けたりケーキやピザに飾る用の木の実、出演するキャラクターのお面、ケーキとピザの台紙、動物の家などを厚紙や模造紙、画用紙、ダンボールなどマグネットなどを使って作りました。また木の実を折り紙などで作り、両面テープやガムテープ、ボンドなどではずれないようにして作りました。

（執筆者：保坂輝穂・友添美和）

3.実践に際して大切にしたこと

絵本を通して、数を数えて遊んだりすることを目的としました。一緒にピザやケーキを作ったりしながら楽しく数遊びも学べたらいいなと思いました。子ども達の反応を見ながら、木の実やフルーツの置く位置を一緒に考えました。

(執筆者：桐原李羽)

今回作ったケーキやピザの写真

4.内容について

（1）　全体の構成

最初に子どもたちの興味を引き出す為に、動物のシルエットクイズをした。子どもたちが分かりやすいように動物の色を使って提示したり、動物を半分くらい見せてヒントを出した

りして子どもたちみんなが答えやすいよう工夫した。子どもたちがバラバラで答えると聞き取りにくい為、「せーの！」と声掛けをして答えてもらった。
シルエットクイズで出た動物が物語に出てくる。
前半はリスたちが動物たちの家に木の実や果物を届けに行くのを子どもたちは見守る。後半はピクニックに持っていく食べ物を一緒に作る参加型にした。ケーキ作りではぶどうといちごの飾り付けで「どこに置いたらいいかな？」と動物が子どもたちに聞き一緒に作った。ピザ作りではケーキと違い、保育園にピザの生地と果物を事前に届けて同時に作った。見るだけではなく子どもたちも一緒に作ることで楽しめるように考えた。

子ども達と遊んだ小道具等

（執筆者：樋口真理亜・古賀詩織）

（2）　子どもたちとの対話について

子どもたちも見ているだけでは楽しくないので、セリフを言いつつ子どもたちに問いかけをしながら、物語に自分も参加している気分を子どもたちが味わえるようにした。初日に行った園では、ほぼ学生間でのやり取りのセリフが多く、子どもへの声掛け・対話が欠けていた。最後にみんなでピクニックをして作ったケーキやピザを食べるシーンで、初日は学生だけで食べるマネをしたり、「美味しいね」などのやり取りをしていたため、子どもたちは何をしていいか分からない時間が出来てしまった。先生方の意見を取り入れ、子どもたちも学生と一緒に作ったものを食べるという設定に変えた。

ケーキやピザを作るシーンでは、子どもたちに木の実を置く場所がどこがいいかを聞くことにした。しかし、オンラインでの対話ということもあり、上手く伝わらないことや、子どもたちが全員で話すため聞き取りにくいこともあった。そこで、置いてもいい時は〇、ダメな時は×を手で表すようにした。すると、学生側からも子どもの意見がわかりやすく、ダメという子がいたら次どうしようかと判断しやすかった。

学生だけで話を進めるのではなく、間に子どもへの質問を投げかけたり、子どもたちにも作ってもらうなど、子どもたちにも話に参加しているということを感じてもらえるようにした。

（執筆者：梅本楓、友添美和）

（3）表現の工夫

子どもがみている中で、物語が切れないようにカメラの切り替えを行いました。道具とチームのメンバーの配置を見てカメラをどこの位置に持っていくのか、物語を作る上で黒板を載せないようにしようなど子どもたちが物語に入り込めるように行いました。1回目では、小道具を直すところが見えてしまったりなどの反省がありましたが、反省を活かして、カメラの位置にテープをはるなどし、効率よく行えるように心がけました。
機材を使ってカメラの切り替えをしている姿（画面外の様子）

（執筆者：阿部巧）

（4）音と音楽

初めのナレーションの所は「山の音楽家」を選び、話の間に入れる音楽としてシンプルな「元気に出発」を選んだ。山の音楽家では絵本の中に出てくる登場人物は全員が動物で絵本の内容に1番ぴったりだと思ったから山の音楽家を選んだ。

こども劇場で1回目では劇の間に無音の時間があったので子どもたちの反応が良くなかった所があり2回目ではそこの部分をどうするか悩んだ。その無音の時間を絵本を映しピアノの演奏を入れることで2回目では少しは子どもたちの反応も良かった。
写真はピアノ演奏の姿。

（執筆者：乗富千裕）

（5）　プレ幼教子ども劇場における子どもの姿と省察

プレ幼教劇場を実践した際に子どもたちは、動物クイズに積極的に答えたり、クイズの正解不正解も楽しんでいるように見えました。しかし、自分たち自身の演じる流れが良くなかったからかストーリーの理解が少し追いつかなかったようにも見えました。また、作成している木の実が小さくて見えなかったり、道具のはけが見えていたりしてストーリーに入り込めていなかったと思います。

（執筆者：大塩智美）

（6）取り組む過程での改善と工夫

導入の際は、プレ幼教こども劇場の際は、子どもたちがそれぞれ答えを言ってくれていた為、聞き取りずらかったと感じた。そこで、子どもたちそれぞれにクイズの答えを言ってもらうだけでなく、みんなで声をあわせてクイズの正解をゆってもらうようにした。たくさんのクイズを準備していたが、時間を考えながら減らしたりした。

実践の際は、プレの際に子どもたちの反応があまりよくなかった為、本番までに台本を大幅に変更し、子どもたちと対話できる時間をつくった。そして、プレのときに画面の切り替えで無音の時間が長く続いたり、小道具を撤収しているとこが写ってしまったりしていた。だから、切り替えや撤収の際は絵本などを写して音楽を流し、無音の時間ができるだけできないようにした。最初は、ケーキやピザをつくる際は台の上でつくる計画をしていた。しかし、実際に動きながら子どもたちと対話しながらつくったほうがいいという案がでた為、大きなケーキやピザの形をつくり子どもたちに聞きながら一緒につくるように変更した。ピク

ニックのシーンでは、プレの際は学生だけで会話をしていた為、子どもたちはただ見ているだけになってしまっていた。その為、本番では子どもたちにつくった物の周りに行ってもらって、一緒に対話しながらピクニックをしているように感じてもらえるように変更した。

（執筆者：後藤聖佳、境結愛）

（7）幼教子ども劇場での子どもたちの様子と省察

子どもたちは幼教こども劇場を楽しみにしている様子だった。こちらが問いかけると、元気よく言葉を返してくれて、子どもたち自身が主体的に活動に参加できていたと思う。時々こちらの声が届いていなかったり途切れることがあり、少し戸惑った様子も見られた。事前練習の段階で自分たちの声の大きさやテンポを入念に確認する必要があったと感じた。

（執筆者：山村京平）

5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

【阿部巧】

今回の幼教こども劇場では、途中からの参加でカメラマンとしてちゃんと回せて行けるか不安があった。しかしチームのみんなと協力を図り、位置決めなどを行った。最初の1回目は、チームの中で情報が共有できてなく、失敗が多々あった。小道具を作るにあたって、子どもたちに、何を届けたいのか、何を感じてもらいたいのかを整理して考える難しさを感じた。カメラマンとして工夫した点は子どもが見て見やすいように心がけること、切り替えを早くすることに心がけた。1回目では、道具を直すところが写ってしまい、子どもからの指摘を貰ってしまっていた。2回目では、台本が変わったということがあり、カメラの位置もかわっていて、カメラマンとして、カメラの位置を変えるところが増え、大変だったが、子どもの笑い声などを聞くとやってよかったと感じた。チームのみんなも子どもと、会話を行いながら物語を進め、裏方は、物語が綺麗にみれるようにカンペや、カメラの位置を考えながら動けて、大変だったが協調性を感じれる取り組みだった。

【梅本楓】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、チームメンバーと連携を取り、計画に基づいた準備の重要性である。準備段階でチーム内の連携が不十分であり、情報の共有が欠けていたことがあり、これがメンバー同士の誤解や準備の遅れに繋がってしまっていた。特に絵本を題材にした背景や小道具の作成において、途中でどうするか決める部分も多く、準備が後手に回ってしまい、本番の前日遅くまで準備を行うまでになった。また、リハーサル練習では段取りがうまくいかず、本番までのシミュレーションも充分に行えなかった。これらの点から効果的なコミュニケーションや明確な目標設定、段取りの重要性を痛感した。こども劇場本番の日には子ども達に対してハキハキと明確に話して何をしているのか、何がしたいのかを理解して貰うように意識した。子ども達も大きな声で返事や反応をして取り組んでくれたので良かった。一日目の振り返りでは問題点が話し合う中で分かり、二日目では一日目の問題点を元に皆が改善出来ていた。最終的にはメンバーと協力して段々とクオリティが上がっていき、無事に終えることが出来たので良かったと思えた。

【大塩智美】

今回の幼教子ども劇場を通して学んだことは、グループ内の連携や協力することの大切さだ。一人ひとりに振り分けられた役割はあったものの実際にどう動いたら良いのかが分からない人が多かったり、段取りも理解出来ていない状態だったりで作業がなかなか先に進めなかった。『ベリーくんの木の実屋さん』のストーリーをどう進めていくのかの情報共有が不

十分であり、連携があまり取れていなかったように感じた。また、役割にとらわれすぎて周りに頼ることも出来ていなかったのかなと思う。自分の役割だから、ではなく、役割だけど手助けしてもらおうという気持ちがあればもっと協力して、良い連携が取れていたのではないかと思う。そして、プレ幼教こども劇場では、言葉で伝えることの難しさを実感した。自分たち自身はストーリーを理解しているからこそ内容を省略したり言葉を変えたりしていたけれど、初めて見る子どもの立場からすると伝わらないこともしばしば感じられた。しかし、この経験があったからこそ言葉選びの重要さを感じることが出来たし、グループ内で協力することの大切さも学ぶことが出来た。

【桐原李羽】
　今回の幼教こども劇場を通して学んだことは、グループ内での協力と報連相の大切さである。まず、同じグループの仲間なのにそれぞれが何をしたらいいのか全く情報が共有されていなく準備もまばらに進んで本番ぎりぎりまで制作がかかってしまった。グループ内で誰が何を担当するのか話し合えれていれば順調に準備を進められたのではないかと思った。また、練習の時間もあまり取れずに全体的に効率が悪かった。。自分達が楽しむことで子ども達にも楽しさを伝えられたらと思っていたが、思うようにはいかずに本番を迎えたのでもっと練習を積んで慣れておくことが大切だと分かった。本番に至るまでいろんなことがあったが、台本通りにいかなかったときもそれぞれが子ども達の反応を見ながら臨機応変に対応できていたと思った。子ども達の気持ちに寄り添った声かけをしたり、1回目の反省を踏まえてどうしたらもっと良くなるか考えて2回目を実践できたことは良かったと思った。オンラインということもあり難しい部分もあったけど、子ども達が楽しめていたのでよかったと感じた。

【古賀詩織】
　今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、事前の準備がとても大切だということだ。約1ヶ月という限られた期間で劇に使う絵本の選定から物語の構成、音楽などを自分たちで考えることは今までしたことがなかったため手間取った。また、私たちのグループは物語の流れをプレ幼教こども劇場の後に変更したためその変更に伴う準備を急いで行った。分担して作っていくなかで役割を分担するのはいい案だったが連携を取ることの大切さを感じた。お互いにいま何をしているのか、どこまで準備が進んだかなどを把握し合う必要があると思った。準備の過程で大人数でひとつの劇をすることはひとりひとりが責任をもって行動する重要性を痛感した。今回の幼教こども劇場は大学と保育園で画面越しにオンラインで関わったため子どもたちにどんな言葉かけをしたら楽しんでもらえるかを頭に入れて取り組んだ。子どもたちの反応を見て子どもたちはこんな風に思うんだなと学ぶことができた。私たちのグループはカメラを実際に使って練習することが他のグループに比べて少なかったためその練習を何回も行うことが大事だと思った。

【後藤聖佳】
　今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、「報連相の大切さ」であった。このグループは、報連相がほとんど無かった為、他のグループと比べ全体的に取り掛かりが遅かったと思うし、雰囲気も悪かった。私は、途中でこのままでは絶対に上手くいかないと思い話し合う機会を何度か作った。少しずつではあったが、その時の状況だったり、自分の気持ちをお互いに伝え合うようになっていき、少しは成長出来たと思う。プレ幼教子ども劇場では、先生方や友達から沢山のアドバイスを貰った。本番では、そのアドバイスを活かしながら自分達なりに取り組む事が出来た。準備の過程では、やはり報連相が無かった為、材料の買い出しや誰が何を作るのかで揉め、1人だけではなく、みんなが嫌な思いをしていたと思う。その気持ちを言葉ではなく、それぞれが行動で移したりしてしまっていたのでそこが1

番の反省点だなと感じた。実践の際の子どもの反応は、子ども達と対話をする中で質問をしたりする事で自分の意見を伝えてくれたり、声のトーンや表情からも楽しめていたと思う。

【境結愛】
今回の幼教子ども劇場を通じての最大の学びは、グループ内の意思疎通が大切だということである。指示が上手く通っていなかったり、決まったことなどをそれぞれ違う認識してしまっていたりしていた。そのため、グループ内がギクシャクしていた。分からないことは質問したり確認したりすることが大切だと感じた。みんなで役割分担しないと誰かが大変になると感じた。自分から何をしたらいいのか積極的に行くことができなかったので他の人たちに負担をかけてしまっていたかもしれないなと感じた。プレ幼教こども劇場の際は、流れも上手くつかめていなかった為、子どもたちの反応はあまりよくなかった。それから、台本を変更したり小道具を増やしたり、カメラワークを考えたりしながら工夫して本番に挑むことができた。本番では、プレでの反省を生かして子どもたちもいい反応してくれたかなと思った。カメラワークの練習などすることが少なかったのでもう少し練習できたらよかったかなと感じた。グループ内での情報共有をして、計画性をもつことが大切だと思った。

【友添美和】
今回の幼教子ども劇場を通じての最大の学びは、事前の準備とグループ内での情報共有の大切さ、人任せにしないということである。このグループは、最初のときから全員揃うということがほとんどなく、準備に取り掛かる段階も他のグループに比べて遅く、周りが小道具を作り始めているときに、配役や遊びの内容を考えていた。遅かったことにより、授業だけでは準備が足りず、昼休みや自宅で小道具を作ることもあった。また、今準備がどこまで進んでいるのか、誰が何を作っているのか、材料は誰が買ってきているのかなど、グループで情報を共有するべきだったのにしなかったため、グループ内で話が食い違っていたり、思っていたものと違うものができていたり、雰囲気も悪くなり不満が溜まっていたと思う。プレ幼教子ども劇場は、セリフが曖昧になっていたり、子どもたちへの対話が少なかったことで、子どもたちの反応が薄かった。先生からのアドバイスや、プレ幼教こども劇場をやっての反省から、セリフや小道具を変えたり、新たに子どもたちにも作ってもらうピザを用意するなど改善した。私は、主に動物の耳を担当していて、プレ幼教こども劇場のときは動物の耳を付けていたが、子どもたち側からは分かりにくいということで、お面に変えて、どの動物かはっきり分かるようにした。本番では、改善点を踏まえ子どもたちにも参加してもらったり対話を増やしてやったところ、反応も良く、私たちも納得のいくものができたと思う。グループ内で役割分担や準備などを早めに計画的に行ったり、情報共有をちゃんとしていたら、もっといいものが出来たんじゃないかと思う。大変なこともあったが、最終的に良かったと思えるものができたので良かった。

【乗富千裕】
今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、報連相の大切さと協力するという事の大切さである。準備の過程では休みも多く誰が何をするなどの準備が始まっておらずスタートが他のグループよりも遅かった。また、配役の変更や台本など情報の共有が出来ておらずトラブルになってしまっていたりした。本番が近づくにつれグループ全員で考えるということを始め、そこでも話が上手く噛み合わなかったり考えを伝えることの難しさを実感した。プレ幼教こども劇場では上手く進めることが出来なかったようで反応が薄かったり子どもたちが戸惑っている様子が見られていた。そこから何がいけなかったのか考え小道具や台本などをほぼ一から考え直して改善することが出来た。また、一人ひとりの仕事量の差が大きく小道具作成の時は色々思うところが各々あったと思う。自分はピアノ担当ということで途中で変わった配役の1人でもあって2曲ピアノを弾いたが少し余裕があったのでなにか他の曲も

練習しておき臨機応変にピアノを弾けるようにしておけばもう少し空きの時間が無くなっていたのでは無いかと思った。

【樋口真理亜】
今回の幼教こども劇場を通じて最大の学びは、限りある時間の中で、グループ内の意思疎通や事前準備の大切さである。グループでやっていく中で意思疎通はとても大切だと感じた。本番が近づく中、必要な小道具も揃っておらずバラバラでそれぞれが準備に取り掛かったことで、お互いが不満を抱えてしまっていた。プレ幼教こども劇場では、子どもたちの反応は薄かったことで、台本の内容を大幅に変更したこともあって、必要な小道具も増えてしまい、本番に間に合うかどうかとても不安が大きかった。だが、本番では子どもたちの反応も良く、私達も楽しく取り組むことができていた。グループ内で不満が出ないようにそれぞれが話し合って意見交換をすることでよりもっと子どもたちも楽しめたのではと思った。また、今自分が何をすべきか把握したり他の人のお手伝いをもっと自主的に取り組んでおくことで、前日までバタバタせずに沢山セリフ合わせができたり練習ができたなと思った。

【保坂輝穂】
今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、協力関係が大切である。と思った。準備の過程ではこっちはやっているけど、こっちはやってないなど説明とかの関係などにより、上手く意思疎通が出来ず、全体的に作るものがギリギリになった。一応間に合うことが出来たので、良かったが、間に合うことが出来なかったらもっと大変だし色々改善や考える事がたくさんあったのではと思う。私の説明などが上手く伝わらなかったりしたので気をつけていきたいと思った。実践の際の子どもの反応は、プレの時はあまり子ども達が参加する形ではなかったし、道具などの作業も遅れていたので、子ども達の反応としては、いまいちだった。だがそれを経験したことにより、色々改善されもっと良いものができ、子ども達の反応も良かったと思う。もう少し時間などがあればもっと良いものは出来たかもしれないが、1回目よりも2回目とどんどん成長できて、自分達の改善点なども再確認出来たので良かったのかなと思った。

【山村京平】
今回の幼教子ども劇場を通じての最大の学びは、主体性と協調性の両立、そしてお互いの欠点を補い助け合うということだ。準備の期間が極端に短かったという訳ではなかったが、私たちのグループはなかなか意見が出なかったり、人任せにしてしまうこともあった。制作等の作業に取り掛かるまでに時間をかけすぎたこともあり、その後の作業が本番ギリギリまで終わらなかったり、焦燥感や不安が募り、意見の相違がうまれたりすることが多々あった。私自身を振り返ると、発言こそしていたものの、その後が他のメンバーに任せっきりになっていることが多く、とても負担をかけてしまっていたことや、一人一人への思いやりや気遣いが不十分だったと痛感した。なにも1人だけが頑張る必要はないけれど、それぞれが自分に出来ることをしなければしなかった分だけ誰かの負担になってしまうということに気付くことが出来た。幼教子ども劇場という行事を通して、自分に足りない部分や未熟さに気づくことができて本当に良かったと思う。

6、資料
私たちが作った小道具などです。一部ですがご参考になりましたら幸いです。

どうぶつ
クイズ

amazon
教室
1409